

所在地 宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字十郎田ほか、大字平沢字都地内

立地環境 円田盆地北部、藪川左岸の標高 82～98 m の自然堤防上

発見遺構 掘立柱建物、竪穴建物、材木堀、大溝、区画溝、溝、土坑など

年代 7 世紀後半～8 世紀前半

遺跡の概要

1 遺跡の立地

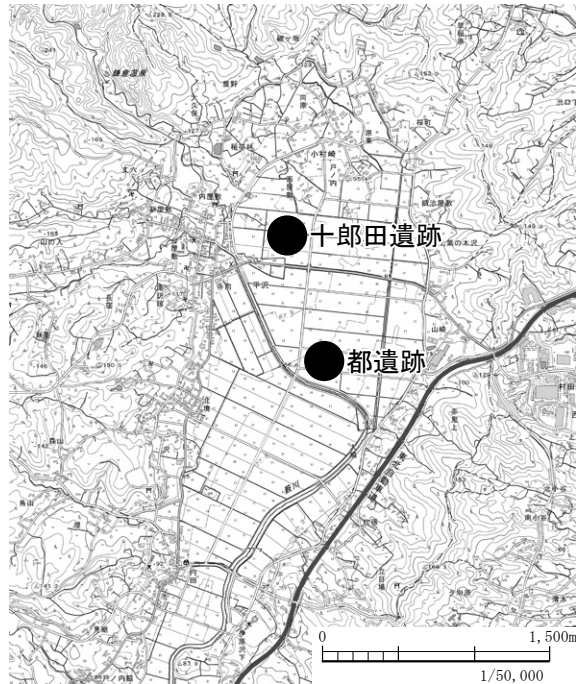
十郎田遺跡、都遺跡は蔵王山東麓の円田盆地北部、阿武隈川支流の白石川水系に属する小河川の藪川に沿う自然堤防上にある(第 1 図)。十郎田遺跡は盆地北縁に近い低平な舌状地形上に、都遺跡は盆底面の中央部に位置する低平な独立丘上に立地し、両遺跡の直線距離は約 700 m である。

2. 十郎田遺跡の概要

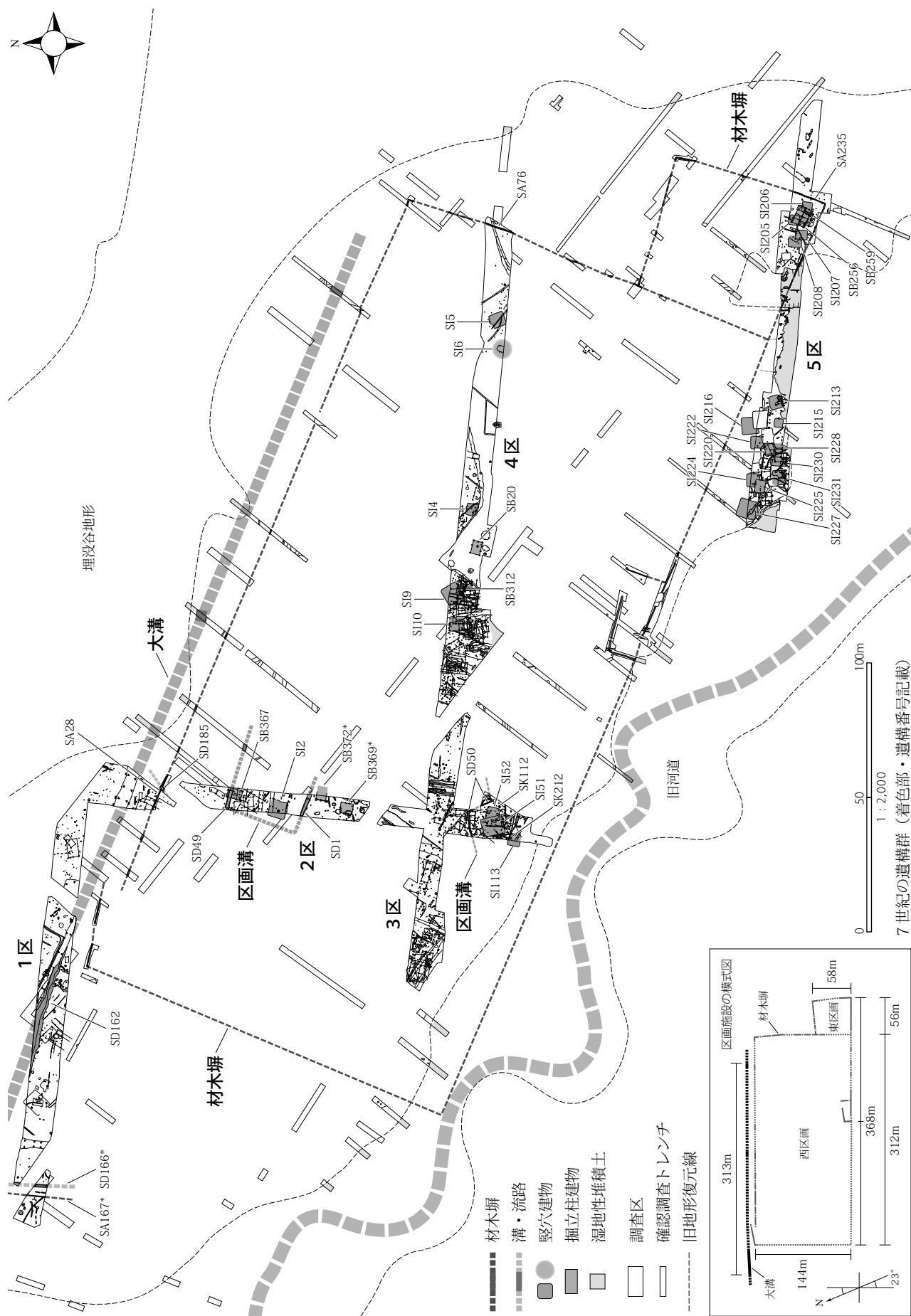
①**規模・平面形** 十郎田遺跡は、材木堀で広範囲を囲繞し、内部に竪穴建物と小規模掘立柱建物を配置した「囲郭集落」(村田 2009) として知られる。材木堀区画は北西－南東方向に細長く伸びる自然堤防上を直線的に区画し、真北から約 23° 東偏する。長方形の西区画(約 312 m×144 m)の南東側に方形の東区画(約 56 m×58 m)が連結し、全体の規模は長辺約 368 m、短辺約 144 m となる。また、材木堀区画の北辺に沿って丘陵部との間を断ち切る大溝(上幅約 3.5 m、延長 53 m 以上)が配置される(第 2 図)。

②**区画施設** 材木堀は幅 40 cm 前後の布掘り状の掘方内に直径 20 cm 前後の柱材を芯々約 45 cm 間隔で配列し、傾斜地では掘方底面が階段状となる(第 3 図)。柱材下部が残存するものが多く、断面観察から廃絶後は柱材の地上部が切り取り撤去されたと考えられる。用材は底面が平坦に切断され、横断面形が半円形・三角形・台形を呈する割材(芯去材)が大半で、丸太状の芯持材は少ない。東区画北辺(SA28)の 11 点、東辺(SA76)の 2 点、西区画東・南辺(SA235)の 26 点の柱材から採取した合計 39 試料を対象とした樹種同定分析の結果、2 試料(コナラ節、ケヤキ)を除く 37 試料(95%)がクリと同定された。選択的な用材調達と斉一的な製材技術が窺われ、きわめて計画的・組織的な造営背景を示唆するものと考えられる。大溝は横断面形が上幅約 3.5 m の逆台形を呈する。自然流入土により埋没しており、最上層に灰白色火山灰の堆積を確認した。材木堀北辺に沿って延長 53 m 以上を確認した。

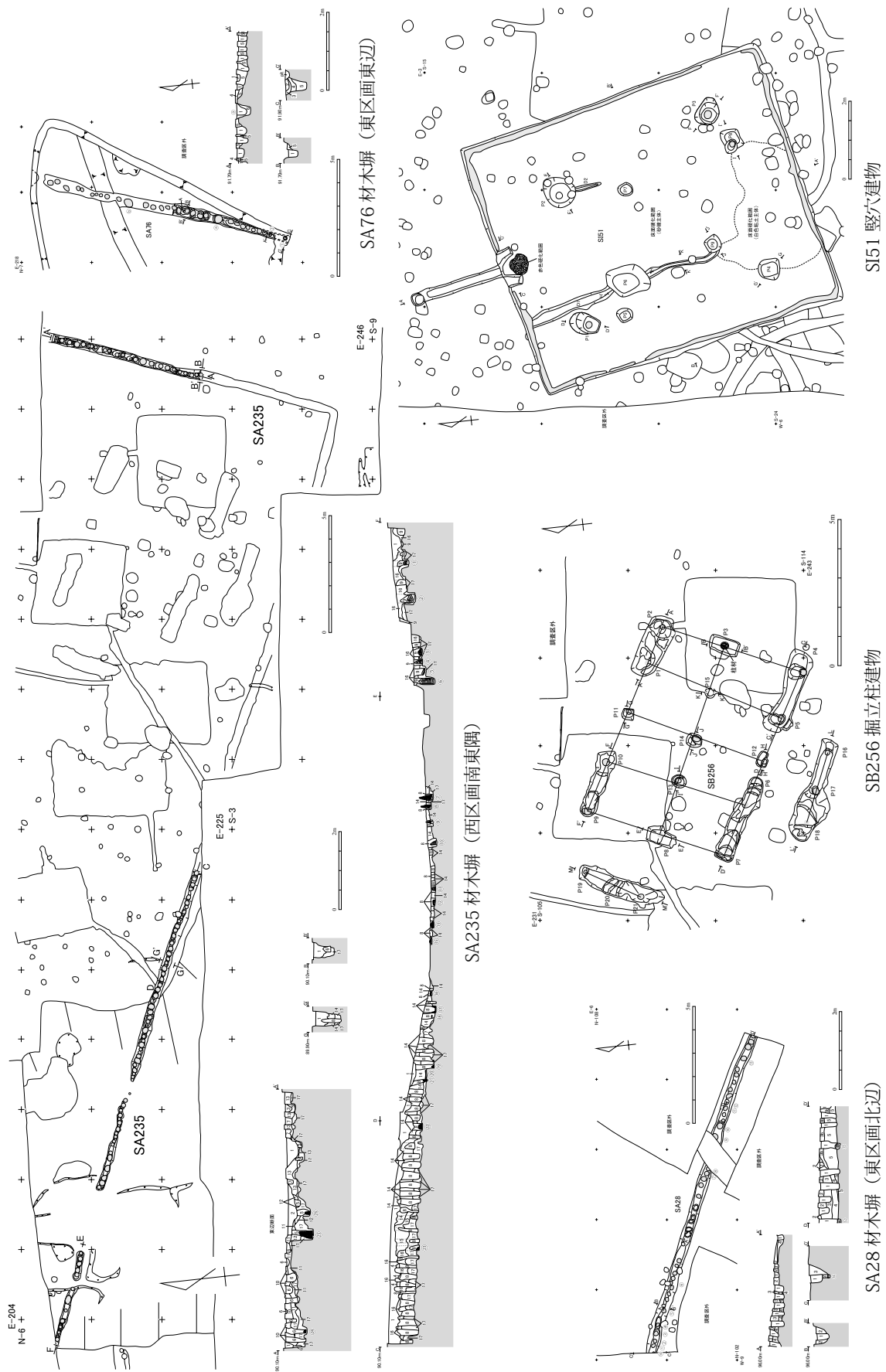
③**内部施設** 内部施設は竪穴建物を主体に少数の掘立柱建物があり、一部で区画溝を伴う。竪穴建物は区画内に分布し、南東部では区画内外に密集する。一辺 4～6 m 程度の中型のものが主体だが、長辺 8.0 m、短辺 6.4 m の大型建物(SI51)も見られる。方位は概ね正方位を採るものが主体ではあるが、斉一的ではない。重複も多く確認され、数時期の変遷が考えられる。カマドはほとんどが北壁に付設され、その形態は長く伸びる煙道を持つ在地型カマド(第 3 図、SI51・52・205・206・225 など)、



第 1 図 十郎田遺跡、都遺跡の位置

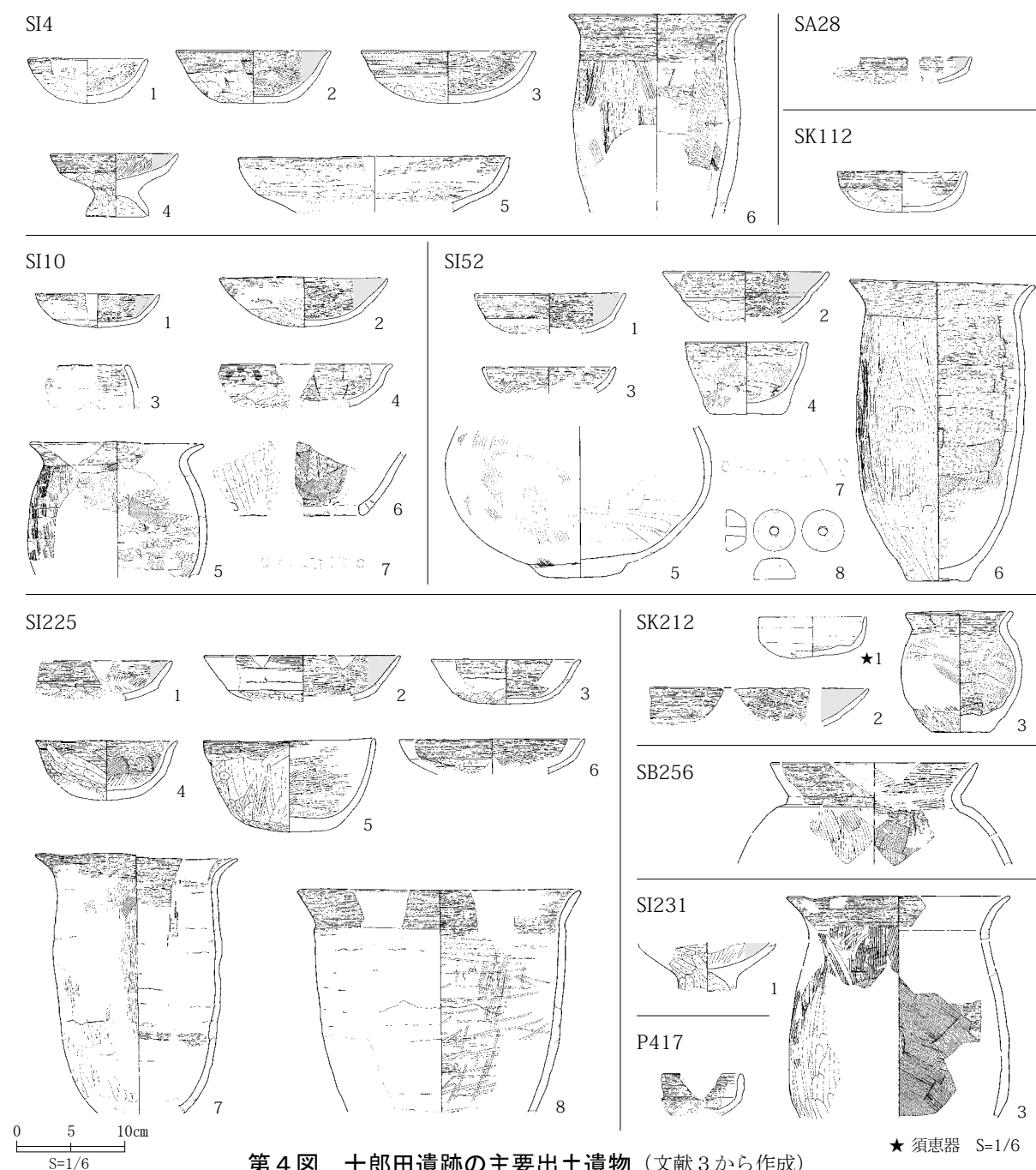


第2図 十郎田遺跡の遺構配置図 (文献5を一部改変)
7世紀の遺構群 (着色部・遺構番号記載)



第3図 十郎田遺跡の主要遺構 (文献3から作成)

燃焼部奥壁が建物壁面より張り出し、煙道を持たない関東型カマド（SI4・5・207・215 など）があり、その比率は概ね半々である。また、約半数は支柱穴を持たないという特徴も見られ、小規模で仮設的な性格を思わせる。東区画の南東隅で確認した竪穴建物（SI205・206）は、区画に方位を合わせた掘立柱建物（SB256・259）に壊されている。区画の内外で確認した竪穴建物の特徴に目立った違いは見られないことから、南東部に密集する竪穴建物群は、区画施設の造営に先行する仮設的な集落とも考えられる。掘立柱建物は材木堀区画内に少数分布する。小規模な側柱建物が主体であるが、東区画南東隅にあり区画に方向を合わせる SB256 掘立柱建物は桁行 4 間（6.81 m）、梁行 2 間（5.07 m）の東西棟床束建物（柱筋交点型・添柱なし）で、倉庫の可能性が考えられる（第 3 図）。この SB256 は、隅柱を含む各 2 基の柱穴を東西に連結した布掘り状の掘方を持つ。こうした形態の柱穴を持つ建物は白石市大畑遺跡（薊田郡家正倉院、宮城県教委 1995）、角田市角田郡山遺跡（伊具郡家正倉院、角田市教委 1996）、仙



第 4 図 十郎田遺跡の主要出土遺物（文献 3 から作成）

台市郡山遺跡（Ⅰ期官衙倉庫群、仙台市教委 1989）、大和町一里塚遺跡（黒川郡家正倉院、大和町教委 2003）などでも確認されている。官衙正倉院の一部に特有の建築技法で、千葉県日秀西遺跡（相馬郡家正倉院）、神奈川県長者原遺跡（都筑郡家正倉院）などに類例が散見され、関東地方に由来が求められる（佐久間 2003）。このため、東区画は倉庫などの建物が計画的に配置され院を形成していた可能性がある。区画溝は上幅 150cm で南北 29 m、東西 24 m 以上の方形区画と見られるもの（SD1・49）、上幅 80cm で SI51 大型竪穴建物の北・東側を東西 10.5 m 以上の鉤形に巡るもの（SD50）がある。こうしたことから、本遺跡は「柴田柵」とでも称すべき官衙的機能を備えた城柵と考えられる（鈴木 2018）。

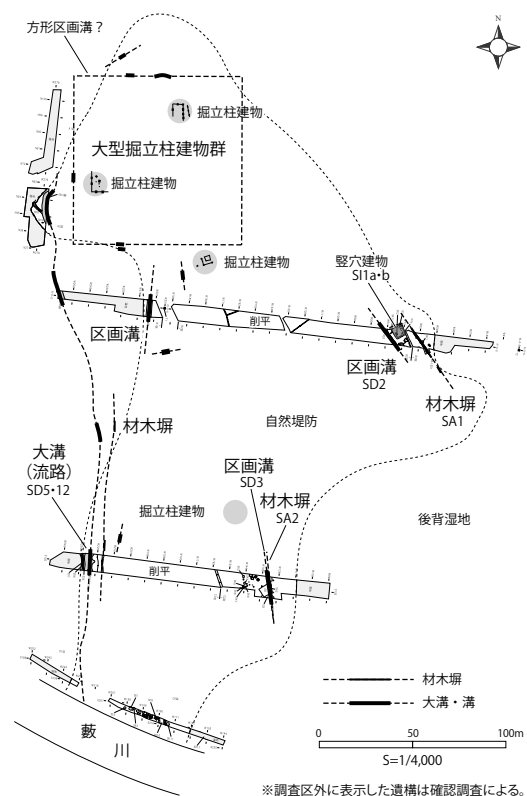
④出土遺物 遺物は竪穴建物・溝などから土師器、須恵器、刀子、石製紡錘車、砥石などが出土している。ややまとまった資料が得られているのは、SI4・9・10・52・225 など、在地の栗圀式土師器に関東系土師器を伴う（第 4 図）。在地土師器は村田晃一氏による宮城県中・南部の編年（村田 2007）でいう 4 段階に相当する。関東系土師器は坏類に多く認められる一方で、甕などの煮炊具は在地土師器を基本としている。須恵器は稀少ながら陶邑田辺編年（田辺 1966・1981）Ⅲ期 TK217 型式の坏がある。

⑤年代 遺構出土木材を試料とした放射性炭素年代測定（AMS 測定）に基づく暦年較正年代は、SI231 竪穴建物の柱材（辺材部を除去した割材）が 539～641calAD、SB256 掘立柱建物の柱材（芯持材の辺材部）・礎板が 585～657calAD、SA28・76・235 材木堀の柱材（辺材部を除去した割材など）15 点のうち 12 点が 535～655calAD の範囲に示された。用材の樹皮に近い辺材部が残存する試料は少ないことから、使用された樹木の伐採年代は上述の年代よりもやや新しく見積もられ、これらの遺構の機能時期は概ね 7 世紀後半と考えられる。

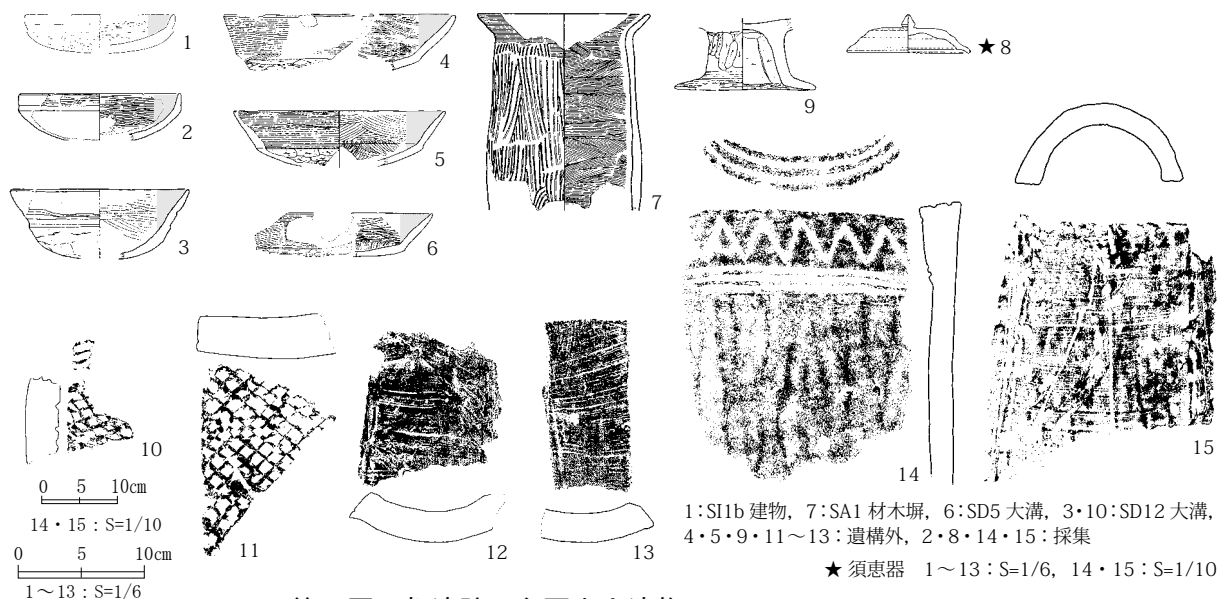
3. 都遺跡の概要

①規模・平面形 遺跡はかつて小高い残丘状の地形であったが、明治中期と昭和 37・38 年の藪川築堤工事で土取り場となり、大規模な削平を受けた。このとき、土器・瓦などが多量に出土したとの話が残るが、学術的な調査には至らなかった。県営は場整備事業に伴う発掘調査（蔵王町教委 2005）では、遺跡中心部が大規模な削平により壊滅しているものの、辺縁部を中心に遺構が残存していることが確認された。微高地の辺縁部に沿った不整形の材木堀区画の内部に竪穴建物などを配する「囲郭集落」とみられる 7 世紀後半～8 世紀初頭の遺構群と、遺跡北部に位置し正方位の大型掘立柱建物を配置しこれを囲繞する一辺 88 m 四方の方形区画溝が推定される 7 世紀末～8 世紀前半頃の遺構群が確認されている（第 5 図）。後者の遺構の詳細は詳らかでないが、後述する瓦の存在などから官衙または寺院の可能性が考えられている。

②区画施設 囲郭集落に伴う材木堀は丘陵辺縁部にあり、遺跡東側では SA1・2 堀が接続して不整形の区画を形成していたと考えられる。また、SA2 堀が同位置で SD3 溝に造り替えられていることから、SD2 溝も SA1 堀に後出し、区画施設は材木堀から溝に置き換わったと考えられる。SD5・12 大溝は西側の丘陵辺縁部に沿って南北に流れる流路で、人工的な運河の可能性がある。



第 5 図 都遺跡の遺構配置図
(文献 5 から作成)



第6図 都遺跡の主要出土遺物 (文献1・2・5)

③内部施設 囲郭集落の内部施設としては7世紀後半の竪穴建物2棟(SI1a・b)のほか、確認調査によれば複数の竪穴建物が分布する。正方位の大型掘立柱建物2棟、方形区画溝も確認調査によるもので、掘立柱建物は柱穴が一边1.1～1.3mの方形で、柱間寸法約2.4mの大規模なものである。

④出土遺物 遺物量は多くないが、竪穴建物・溝などから土師器(7世紀後半～8世紀初頭)、瓦(7世紀末～8世紀前半)、石製紡錘車などが出土している(第6図)。このほか、昭和30年代後半の採集資料が報告されている。土師器は在地の栗圀式土師器と関東系土師器が見られる。在地土師器は村田晃一氏による宮城県中・南部の編年(村田2007)でいう4・5段階に相当する。瓦は発掘・採集資料を合わせて軒平瓦2点、平瓦11点、丸瓦1点がある。軒平瓦は瓦当面に手描き三重弧文を施し、凸面に格子叩き目を持つものと、瓦当面に手描き二重弧文を施し、凸面に柂目板による叩き目を持つものがある。後者は断面三角形の顎部を持ち、顎部の凸面に沈線による鋸歯文を施文する。各1点のみではあるが、両者は形態的特徴と製作技法を異にしており、技法的には後者が後出的である。柴田・荻田郡域内ではほかに柴田町兎田窯跡、白石市兀山窯跡・大畑遺跡で同時期の瓦が出土しているが、いずれも本遺跡の資料とは特徴が異なり、未発見の窯跡の製品と考えられる。

関連文献

- 1 蔵王町史編纂委員会 1987「都遺跡」『蔵王町史 資料編Ⅰ』
- 2 蔵王町教育委員会 2005「都遺跡」『都遺跡ほか』蔵王町文化財調査報告書3
- 3 蔵王町教育委員会 2011a『十郎田遺跡1』蔵王町文化財調査報告書13
- 4 蔵王町教育委員会 2011b『十郎田遺跡2』蔵王町文化財調査報告書14
- 5 蔵王町教育委員会 2014『円田盆地の遺跡群1』蔵王町文化財調査報告書19
- 6 鈴木雅 2016「律令国家形成期の陸奥国柴田・荻田地方—蔵王町円田盆地の遺跡群の検討を中心に—」『宮城考古学』18 宮城県考古学会
- 7 鈴木雅 2018「旧国造城北縁の集落と官衙—柴田・荻田の様相—」『第44回古代城柵官衙遺跡検討会—資料集—』
- 8 田辺昭三 1966『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 9 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 10 藤木海 2020「陸奥国柴田・荻田郡(都遺跡・大畑遺跡・兎田窯跡)」『古代日本における国郡制形成に関する考古学的研究』大橋泰夫編
- 11 宮城県教育委員会 2002「窪田遺跡・都遺跡・新城館跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書188
- 12 宮城県教育委員会 2003「十郎田遺跡ほか」『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書195